

## ケニアにおけるオープンアクセスの動向

— ナイロビ大学の事例 —

岸 真由美

公的資金により助成を受けた研究成果をオープンアクセス（以下、OA）により一般に公開する世界的な流れができてきた。早くには二〇〇八年にアメリカ国立衛生研究所（NIH）が助成研究成果のOA化を義務づけたのに始まり、最近では二〇一四年五月に中国科学院がOA方針を発表している。こうしたOAをめぐるグローバルな動きのなかで、二〇一二年二月、ケニアのトップ大学である国立ナイロビ大学もオープンアクセス方針を採択した。筆者は二〇一二年三月から一年間、同大学図書館に席を置き、幸運にもその取り組みに部分的に係わる機会を得た。この時の見聞も踏まえ、本稿ではナイロビ大学におけるOA化の取り組みを紹介する。

ナイロビ大学が採択したOA方針の内容は次のとおりである。方針の目的は五つ。①大学の学術活動が生み出す研究成果に対して自由な利用を提供すること、②高い基準の研究成果管理を行うこと、③研究成果を長期的に保存すること、④研究成果を可視化してその影響力を高めること、⑤世界の研究コミュニティとの連携を進めることである。

この目的の達成のため、方針声明には次のような内容が盛り込まれた。まず、OA方針は方針採択以前の学術著作に対しても遡及して適用される。次に、同大学の全ての構成員は学術成果を同大学がOAで運営する「ナイロビ大学デジタルリポジトリ」（以下、リポジトリ）に投稿する義務がある。各構成員が提出する学術成果の著作権については、非独占かつ取消不能な利用許諾がナイロビ大学に与えられる。大学の構成員は自分の学術的著作を査読付きのOAジャーナルに投稿することも推奨されており、査読が完了した論文は受理時もしくは遅くとも出版時までにはリポジトリにアーカイブされなければならない。さらに、大学はOAに関する委員会を設置して全学的にOA化に取り組み、リポジトリの管理・運営は大学の運営管理部門と連携して大学図書館が担う。

ナイロビ大学のOA方針採択にあたっては、同大学図書館が大きな役割を果たした。ケニアでは九二の学術機関が加盟する「ケニア図書館情報サービスコンソーシアム（KLIISC）」が組織されており、KLIISCは「科学出版物の入手のための

国際ネットワーク（INASP）」<sup>(1)</sup>と「図書館のための電子情報（EIFL）」<sup>(2)</sup>による援助のもと、図書館を通じて様々な活動を行っている。同図書館もKLIISCの加盟機関として、INASPとEIFLが進めるプロジェクトのカントリーコーディネータをそれぞれ一名ずつ出している。EIFLのカントリーコーディネータは同図書館で電子資料購読を担当するローズマリー・オタン・ド氏。INASPのカントリーコーディネータを勤めるのは副図書館長アガサ・カプグ氏である。同図書館内はリポジトリ・プロジェクト委員会を設置。この二名がOA推進の先頭に立ち、二〇一〇年から二〇一一年に学内ワークショップの開催などを通じて大学運営管理部門や教職員のOAに対する理解の促進を図るとともに、二〇一二年初めにはOA方針の草案を大学運営管理部門に提出した。

図書館の働きかけに応じて大学がOA方針採択に至った背景には、世界トップクラスの学術機関を目指すナイロビ大学自体がその学術成果をグローバルに可視化する手段を模索していたこと、さらには、特に医学部などの自然科学系を中心としたケニア国内の学生組織もOA化を積極的に推進していたことがあるだろう。

方針採択後、図書館ではリポジ

トリへの学術成果登録件数を増やすためタスクフォースが結成された。二〇一二年末には学位論文数千件の登録に過ぎなかったリポジトリは、その後急速に件数を増やし、二〇一四年七月時点では約六万九〇〇〇件となっている。

世界中の学術機関が生み出す研究成果をタイムラグなしに利用できるメリットは大きい。グローバルに学術成果を共有することが、自機関の成果の可視化と被引用率を高め、かつ他機関の成果も自由に利用できるメリットを開発途上国の学術機関は先進国以上にはつきりと認識しているように思われる。

（きし まゆみ／アジア経済研究所 図書館）

《注》

(1) 研究情報・研究知識の生産と利用の促進を通して開発上の課題の解決をめざす、イギリスの国際開発慈善基金。

(2) 開発途上国の図書館と協力して知識へのアクセス向上に取り組み非営利団体。